

再発見・牛久第一話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

牛久沼が今日の沼域になる

— 関東郡代伊奈忠治の普請によつて —

牛久沼内を二千間堤(土手)でかこい

— 概ね今日の牛久沼の沼域確定 —

古代(奈良・平安両時代)のころ、牛久沼(太田沼)は、香取の海と呼ばれる内海(海跡湖)になっていた。

安土桃山時代(織田・豊臣政権)になると、ひと続きになっていた牛久沼から手賀沼(現千葉県西北部)までは、雨期以外、水深が浅くなり、萱(ヨシ、ススキ、チガヤ、カルカヤ、スゲの総称)が自生する中州が点々とし、所々に浅瀬があつて、多数の小河道(後に利根川になる常陸川ひたちがわ(※)や小貝川)が蛇行していた。(※常陸川は常陸国猿島郡境村(現境町)地先に源を発し太平洋に注いでいた)

江戸時代初期。

代官頭(のち関東郡代)伊奈忠次・忠政・忠治三代総指揮の下で、徳川第2代将軍秀忠治世の元和7年

(1621年)に利根川が流路変更(常陸川に合流)され、同第3代将軍家光治世の寛永7年(1630年)に小貝川が分流され、その後小貝川が利根川に注ぐようになった。

だが、利根・小貝二大河川の流路変更によつて、小貝川の堤と牛久沼がひと続きになると、ひとたび豪雨ともなれば牛久沼の水が氾濫することがあり、洪水時には小貝川の水が牛久沼内に逆流することもあつた。

忠治は、牛久沼の氾濫と小貝川の逆流を防止するために、7年の歳月(寛永4年へ1627年より)を費やし、沼内に「かこい堤(土手)」を築いた。かこい堤の延長は二千間(3640メートル)に及んでいて、後世に通称二千間土手と呼ばれており、またこれによつて概ね今日の牛久沼の沼域が確定している。かこい堤は、一説に二二〇〇余間(約4000メートル)あるとも、あるいはもう一説では二二三二間(4200メートル)あるともいわれている。かこい堤築堤と同時に東側

のかこい堤より、牛久沼の排水と川下村々1万石(現龍ヶ崎市域)の用水と両方の役割を持つ江川用水路が開削されている。(かこい堤の位置は現在でいうと、牛久、龍ヶ崎、取手(旧藤代町)、つくばみらい(旧伊奈町)の4市に及ぶ)

二千間堤築堤によつて、旧沼内の湿地が新田に生まれ変わっている。現在の牛久市域では、城中村、遠山村などに新田が造成されている。

しかし、牛久沼の水は、豪雨のときは、江川用水路だけでは排水できず、氾濫を繰り返していた。そこで、関東郡代第6代伊奈忠篤(または第7代忠順ただのり)総指揮の下で、元禄年間(1688年〜1703年)に、かこい堤の南西側と東側の角付近から、牛久沼の水を小貝川に排水する、南北に流れる「八間堀(今の八間川。幅員八間)」が開削された。

■伊奈流(関東流いりひ)坎樋(水門)の図
関東郡代伊奈忠篤または忠順はちけんぼりおとしくちが牛久沼の八間堀落口に設置した木造の水門の略図。臨機応変に開閉され、沼内の水の排水の調整を図った。

(『土木工要録』より引用)

